



(4) 廣井先生の青年時代

廣井勇先生獨逸より歸朝後、札幌農學校工學科教授時代(明治二十四年)官舎の書齋にて撮影せしもの。

||| 北海道十日の旅 |||

廣井博士の逸話を探ねて

第九信 定山溪

七月十四日の午後は札幌の名勝定山溪を探る事にした。札幌驛の前から乗合自動車に乗る、里程七里、片路賃金一圓、札幌市街を縦斷して豊平橋を渡り、北海道情調豊かな平原を牧場を左右に見乍ら豊平川に沿ふて道は次第に登りこなる。道路は道廳土木部で盛んに修理中だつたが、上流に行くに従つて自動車の震動は激しくなる、旅客は殆ん立つてゐられない位に振り廻はされてゐる。それでも

定山溪鐵道の汽車よりは良いと言ふ話であつた。

最も定山溪鐵道も目下全線電化工事中であつて近くそれが竣工すれば、時間も早くなり乗心地も良くなるであらう。今日は日曜日ではあり初夏の北海道は將に行樂氣分の頂上であるから、大した處用のない人まで乗るので歸りには遂に自動車の屋根の上に乗まで登り上つて喜んでゐる有様は北海道でなくば見られぬ漫畫氣分である。

定山溪は札幌郊外唯一の温泉行樂地で、札幌へ行つた程の人は必ず一浴して來るご云ふ名勝地であるが、恰度内地の箱根塔の澤附近の山容に似てゐる。奇岩怪石ごか、斷崖絶壁ごか特種の仙境ご言ふ程のものではない。豊平川の上流水源深林地帯であるから、北海道としては幽翠なる地點として珍重されるのであらう。溪流を抜んで旅館も十數軒あるが客引のウルサク集つて來るのは却つて興を殺がれる。

我等は溪間を散歩する事一時、暫く小亭に憩ふて夕方早く札幌の旅館に戻つた。

第十信 鐵道三先輩の胸像除幕式

七月十五日は札幌驛前の廣場に建設された故松本莊一郎、平井晴二郎二博士ごジョセフクロフォード氏の胸像除幕式の日である。余は廣井博士傳記資料蒐集のために來札したのであるが



(5) 札幌獨立基督教會堂の前面

此の除幕式を機會に面會したい人が澤山あるので早朝から準備に掛つた。

先づ昨日の約束に依り北六條の自邸に宮部老博士を訪ねた。博士は既に舊知の如き温顔を以て迎へて下さる。靜かな書齋で此の書棚は會て廣井博士が使つてゐるたものごか、其他種々懷舊談をうかゞつた。

午前十時除幕式會場に行く、鐵道協會の海野力太郎氏が何乎ご準備の指圖をしてゐる。やがて來賓が續々入場する、宮部博士は順々に此等の名士に余を紹介された。此等の諸先輩に對しては東京の中山、名井の兩博士からも紹介があつたので非常に好都合であつた。

除幕式は國澤新兵衛博士司會の下に無事終り、直に札幌第一の山緒ある公會堂、豊平館で午餐會が催された。此の席上で三氏胸像建設委員長たる國澤博士が今日此の席上に廣井博士の見えない事を頗る遺憾ごせらるご旨を述べられた事は既に報導した通りである。

第十一信 廣井博士逸話座談會

午後は北海道帝國大學工學部の古藤教授の室で小川敬次郎博士ご倉塚教授ご三人で廣井先生逸話座談會を催された。明治十九年廣井先生渡米の際の保證人が藤波子爵であつた事は初めて知つた。在米中に鍛冶屋をやられたご云ふ事も初めて聞いた。其他三氏から種んな追懷談が出て大に參考史料を得た。

古藤教授の自動車でご余は旅館まで送られたが、あの北大境内の廣々した森や林の下路を走る氣分は到底東京で味へない印象である。

古藤教授の自動車でご余は旅館まで送られたが、あの北大境内の廣々した森や林の下路を走る氣分は到底東京で味へない印象である。

第十二信 北大構内の芝地にて

札幌滞在の第三日たる七月十六日である。今日も晴天に恵まれた事は幸ひであるが北海道も中々暑い、昨日の北大境内の廣い芝地を今一度踏んで見度くなつた。小川博士に電話を掛けて置いて、余は一人北大境内に自動車を走らせた。而して大木の茂みの下の芝地に一人轉がつて向ふの牧場に牛の悠々たるを眺めてゐた。然し樹上には何鳥だか尖つた様な忙しさうな鳴聲が頻りに聞える。

やがて大學の受付の人がやつて來て小川教授が來られたご知らせた。小川教授の室で暫

らく大學の様子や、廣井博士が工學部に對する寄附行爲の事なごも初めて聞いた。工學部の實驗室なご拜見して、俱に構内の食堂で晝餐をした。

午後は北海道廳に、札幌鐵道局に、札幌高等女學校を訪ねた。

北海道廳では土木部の伊藤技師が主となり多數の人々が廣井博士記念事業のために盡力されてをる。伊藤技師はカラフト出張中で不在だつた。河川課の松邑孝一氏が廣井博士に關する逸話を蒐めつゝあつたのは如何にも感謝すべき事である、其資料の中には宮部博士から出た札幌農學校初期の學生成績表なごもあり、廣井先生の製圖の秀れてをつた事なごがわかつた。

松邑氏は佐藤北大總長なごの談を既にタイプに取つてゐられたので、余はそれ以外の方面に努める事に打合した。

第十三信 市内横行

七月十七日、今朝も好晴である。寫眞機を持ち出して北大構内に行つてクラーク氏の胸像を撮影した、クラーク氏は北大の祖たる札幌農學校の創立者で我國文化の大恩人である。廣井博士の傳記にもクラーク氏の熱烈なる信仰の事績は加へられる筈である。

散歩道路は札幌の一名物である。公園式の廣い通りに永山武四郎將軍や、黒田開拓使長官の銅像が立つてゐる、其所で黒田長官の銅像に、札幌獨立教會の正面にを撮影して來た午後から北海道廳を訪ふ、旅館山形屋から

僅かに一丁程の所に在る、境内通り抜け自由で廣々としてをるのは内地の官街に見られぬのびやかさだ。廳舎の建物も赤煉瓦の三階建が巨然と聳えてをる。廳舎門前の大道は全部木塊舗裝が施されてをる。

土木部を訪ねて港灣課の技師中村廉次氏に面會した、中村氏は最近歐米視察から歸朝した新人で港灣技術に關しては伊藤技師に次いで廣井博士に關係の深い人である。中村技師に打合せて明日小樽市の長老波邊兵四郎氏に河野富重氏其他を訪ふ事にした。

廣井博士記念事業の北海道に於ける幹事をやつてゐられる、札幌土木事務所長の杉森技師を訪ねた。小樽市役所の土木課長に紹介され明朝を約して別れる。

それから車を飛して札幌高等女學校を訪ねた。昨日小川博士に同道で校長に面會して來意を通じてあつたので、今日は安藝左代先生に直ぐ會ふ事が出來た。安藝氏の父は小樽築港工事時代に廣井先生の部下として最も親しくしてゐた一人であつたが昨年逝去された。

夜の札幌街を散歩する、宿の近に古本屋があつた、何氣なく這入つて見てゐる中に、明治八年の官員録を見付た。廣井先生が少年時代に世話になつた片岡侍從の項を見るに宮内省六等出仕で月給百五十圓とある。之は面白いものが見付かつたと思ふて値段を聞くに僅かに八十錢だつた。それから小樽築港報文の前編が一冊あつた、之は廣井博士の精魂が最も



(6) 開拓使長官伯爵黒田清隆之像
開拓使長官として北海道の開拓に貢獻したる人、札幌農學校の開設者である。像は札幌市の中央、大散歩道に在り。

深く刻まれてゐるものだ、明治四十三年の印刷で非賣品であるから今日では容易に手に入らないものである、値段を聞くに一圓五十錢と云ふ。早速二冊を求めた。

衣店を歩いてゐると思ふ事は莓と櫻桃の多い事である。何れも余の好物であるが無暗に買込が出来をいのは残念だつた。

第十三信 七月十八日小樽市に行く

札幌を東京とすれば、小樽は横濱に相等する。政治、商業、地勢關係が相似てゐる。然し小樽市は割合に活氣に満ちてゐる様だ。

公園下の閑邸に渡邊兵四郎氏を訪ねて、八十四歳の長身の老翁、中々の元氣である。小樽市の長老としての有力者、廣井博士とは最も親交のあつた人、今は筆硯に親しんで餘生を閑居に楽しんでゐる。余は遂に渡邊氏の談に半日を費した。記念として扇面と色紙を贈られた(34頁参照)

次いで小樽市役所に土木課長を訪ねたが不在、小山氏に案内されて公園に登り廣井先生銅像の位置なき拜見した、其の地點は山の頂上で斜に小樽築港を展望する處である。

次いで眞榮町の小樽製油會社に社長河野富重氏を訪ねた、氏は小樽築港工事時代に廣井博士の指導をうけて吏員より技手となり最も信頼をうけてゐた人である。實業界に入りたる後も廣井先生の指導をうけてゐた人である。河野氏の赤裸々なる懐舊談は多分の逸話資料であつた。

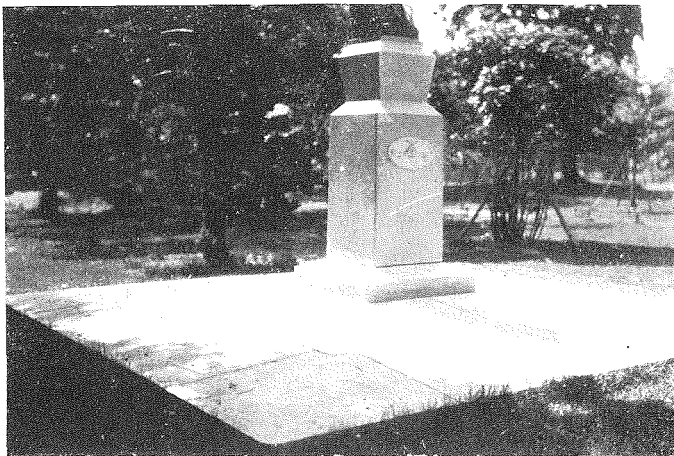
それより轉じて小樽築港驛前の北海道廳小

樽築港事務所に所長檜山千里氏を訪ねた。檜山氏は目下小樽築港の擴張工事の調査に従事せる青年技師である。廣井博士が初めて此の小樽築港の工事計畫に着手した時も青年であつた。檜山技師に案内されて小汽艇に乗り防波堤を視察した。

廣井博士の築造された第一期工事の有名な防波堤は左側の一堤で、鐵道省の石炭積出高架棧橋の近くにある。第二期の防波堤は、伊藤長右衛門氏の築造になるもので右側の一堤である。其何れも實に我國工事界の模範たるもので余は堤上に歩を運びながら、其混凝

土面を視つめ乍ら、一種の敬虔の念にうたれた。波上をかすめて來る風は幾分涼しすぎる位で先に陸上で流した汗は忽ち消え去る。

艇を驛前の棧橋に着け檜山技師と別れて余は一人上陸して夕方の



(7) クラーク氏の像(此の寫眞は失敗しましたが、環境だけを味つて下さい)。北海道帝國大學構内のクラーク記念會館の前にあり、實に札幌農學校創立の大恩人である。

汽車で札幌に戻つた。

第十四信 七月十九日砂川町に急ぐ

早朝宮部邸を訪ふて三度老博士に會し、最後の傳記資料をうけた、愈々別れるに當つて圖らずも余は宮部博士晩年の家庭に一方ならず寂莫を感じるものがあつた、大正九年賢夫人を失はれて以來なき博士は全くの孤獨生活である。命運の然らしむる所は云へ廣井博士の晩年に比しまことに御氣の毒の事と言はねばならぬ。余は宮部博士の晩年に幸ひあれと祈りつゝ遂に邸を辭した。

今朝漸く北海道廳にて伊藤長右衛門氏に會す、氏はカラフト出張中にハシゲの轉覆に會

ひたるも幸ひ負傷もなく、要務を果たして昨日歸札されたのである。氏は既に東京にて面識せるを以て大急ぎにて打合せをなし、氏の紹介にて砂川町の北海土功組合に友成仲氏を訪ぬる事として道廳を辭した。

砂川行の汽車に少し間があるので驛前の札幌鐵道局に改良課長三浦宇三郎氏と再會した、廣井先生を招宴せんとして失敗した逸話の一を得て急いで汽車に乗つた。

汽車の走りは緩いが急行と稱するだけに二三の小驛を通過して札幌から二時間餘りで砂川驛に着いた、廣々とした北海道の空知平原に在る小の市街、其町外れの原中に北海土功組合の粗末な事務所がある。

所長の友成仲氏は明治十八年の東大土木科卒業後北海道炭礦鐵道に關係されたので、恰も廣井博士が一ヶ月前まで腰掛けてゐられた其席に着かれ

たのである。即ち廣井博士が洋行の際に入つたわけである。當時の關係者の事なき聞いた外にそれ程の資料も得られなかつたが、友成氏が此の老齡を以て北海道未開の地に技術家としての天職を果たされつゝある事に、非常な尊嚴を感じた。明治十八年卒業と云へば随分古い事である、都會地附近で無爲の閑日月を送つてゐる當年の同窓顔色なしと言ふべきである。

某氏は友成氏を北海道の水利の神様だと言ふた、或は然らん、友成氏は今北海土功組合の灌漑事業たる水路の延長六十餘里の大王事を竣へんとしてをられる。(工事叢報本號參

照) 余は尚ほ種々ご御話も伺ひ度いのであつたが、既に豫定の時間も過てゐるので遂に夕方御別れした。

夜九時札幌に歸り旅館で明早期の出發仕度をして寢に就いた。

第十五信 七月二十日

午前六時札幌驛を發車して岩見澤驛を廻り長輪線の急行列車にて函館に出た。

岩見澤驛で前の鐵道次官八田嘉明氏に會つた。氏は最近次官の激務を離れて休養旁々母堂と令嬢を伴ひ北海道の温泉旅行をしてゐられた。幸ひ車中談を聞く、何れも廣井博士の逸話たるべきものである。八田氏一行は登別

温泉に向はれ余は又一人にて函館に向ふ。来る時圖らずも野村、國澤、松本、海野氏等と同車して賑かに食卓を囲んだが歸りの車内は静かなものとなつた。野村龍太郎博士と松本政治博士



(8) 札幌市内の景

氏は三氏胸像除幕式舉行の翌日出發上京された。其後國澤新兵衛博士は留岡幸助氏經營の家庭學校の理事たる關係で、北見國社名淵にある家庭學校分場たる教化學園を視察する爲めに出發された。國澤博士は其行程中に十餘里の山路を徒歩するこの事であつた。海野力太郎氏は尚ほ札幌に留つて殘務を處理し乍ら家族愛に親んでゐるのであらう。札幌驛長海野充樹氏は氏の息であると聞く。

青函連絡船も、上京の列車中も努めて原稿に筆を走らせ乍ら二十一日の午後三時赤羽驛に着いた。(本稿は一先づ之で擱筆す。岡崎生)